国立大学法人千葉大学学長の業績評価結果について

学　　長：徳　久　剛　史
任　　期：平成２９年４月１日～令和３年３月３１日

評価期間：平成２９年４月１日～令和３年３月３１日

【評価結果】

国立大学法人千葉大学学長選考会議は、国立大学法人千葉大学学長の業績評価に関する要項に基づき、平成２９年度から令和２年度における徳久剛史学長の業績評価を実施しました。

５月２０日開催の学長選考会議において、学長の業績評価の実施手順等について確認するとともに、業績調書に記載された基本方針、大学運営、教育、研究、社会連携・社会貢献、国際化、附属病院、附属学校及びその他の各項目に係る業績について、６月４日まで書面による審査を実施しました。

その後、各委員の評価結果と監事の意見書等を参考に、慎重に審査・検討した結果、非常に優れているとの結論に至りました。

令和３年６月１８日

国立大学法人千葉大学
学 長 選 考 会 議

様式２

業績調書に係る審査結果（集計）

評価項目	評価
1　基本方針	4.8
2　大学運営に関する事項	4.7
3　教育に関する事項	4.8
4　研究に関する事項	4.6
5　社会連携・社会貢献に関する事項	4.1
6　国際化に関する事項	4.5
7　附属病院に関する事項	4.7
8　附属学校に関する事項	3.8
9　その他	4.6

※評価は，各委員による評価の平均値を示す。

【評価及び評価内容】

評価	評価内容
5	期待を大幅に上回る業績をあげている／非常に優れている
4	期待を上回る業績をあげている／優れている
3	期待する程度の業績である／良好である
2	期待する業績を下回っている／やや努力を要する
1	期待する業績を大幅に下回っている／努力を要する

【特筆すべき事項】P2～P7

【委員Ａ】

とりわけ以下の理由（過年度すでに記述したものを含む）で本年も各項目を 5 とした。

- 令和三年度千葉大学学部入試志願者数は、6 年連続国立大学一位であった。偉業である。その間学長であられた徳久剛史先生は、同年末任期満了で退かれた。初めて一位になった際、国立大学学長経験者でもある学長選考会議委員が、これは学生・家族・学校の評価なのだと言われた。いまだ出口のみえない新型コロナウイルス試練のなか、斯くなる評価は、責任を伴う大学への大きな期待である。そしてこのような姿の千葉大学は、日々たゆむことなくガヴァナンスのきいた協働体制（Synergy）を育みつつ、明確な目標(Vision、 TOKUHISA PLAN 等)を掲げ、豊かな千葉大学の歴史をよすがとしてその実現にはげまれた徳久学長（当時、以下同）そしてこれを各々主体性をもって輔けられた全教職員の方々のもたらされたものである。
- 徳久学長は平成 27 年度以降千葉県の公立高等学校に出向き、学生に「高大接続改革実行プラン」を含め大学教育について講演を行ってこられた。この実行プランにより千葉大学内約 30 のプログラム（バンコックグローバルプログラムも含まれる）が高校生にオープン。入学後早期卒業につながりうる単位付与等「飛び級」などで名高い千葉大学の英才教育は、現在政府（教育再生実行会議）の進めている高校大学接続改革と重なるものである。
- 経営協議会において学長は、関係部局によって周到に準備された資料を完全に掌握、会議を指導、大学運営の仔細に及ぶ透明性をもって常に見直される理事副学長の体制によるガヴァナンスの確保に尽力された。
- ある学長選考会議において、附属病院が臨床研究中核病院として認定されたことのメリットを問われた学長は、次の趣旨を述べられた。「患者に直接還元できるような研究をするのが臨床実験の位置づけである。患者の人権尊重が何より重要であり、そこが担保されないと、臨床実験を安心して進められない。」私がこれを繰り返すのは、この姿勢は人間の尊厳への献身の誓約であって、これこそが最高学府たる大学の指導者の具備すべき実践倫理というか感性である。
  私は、国際化の要諦である人事交流の実施にあたって大学が当事者その他同伴者等のために、実にこまやかな配慮をされているのを知って（例：グローバルキャンパス推進基幹の設置、全方位的学事暦の整備、保険等の手続き支援のための JTB との協定等）、このような配慮は、前出の学長の感性がひろく学内で分かち合われるにいたっている証左だとの印象を持つ。
- なお、科学と倫理といえば、学長は大学の基本目的のひとつに「文理の枠を越えた融合型研究の推進」を挙げておられ、実践項目の例としては“心と脳の発達に関する学際的研究の推進”とされている。そして、このような「俯瞰と協奏の誘起」を求めての「融合理工学府」「人文公共学府」の発足に示されているように学際的に必要な学内制度上の主な整理再編は、学長の指導と各学部・部門の支持協力でほぼ整ったとの印象を持つ。
- 徳久学長は、運営交付金の削減について、「大学がその知を公益のため外に出し、自らもそれに裨益する機能改革を自主的に行なわなければ増加は望めない」との御

認識でこの危機意識はひろく教職員に共有されるに至っている。これは、困難な現実にたじろがない学長の大学運営の姿勢がもたらしたものと思う。この分野での多様な実績は、学長の業績調書（自）平成 29 年 4 月 1 日（至）令和 3 年 3 月 31 日及び「千葉大学統合報告書 2020」にみられる。

- 我が国の安全保障維持にかかわる情報セキュリティの事態にかんがみ「国立大学法人千葉大学サイバーセキュリティ対策等基本計画」が策定された。きわめて重要な決定であり、これがひろく国立大学等の規範となることを強く期待する。
- 「移民・難民」を新しい学問体系として構築する構想。是非積極的に実現していただきたい。故緒方貞子国連難民高等弁務官の遺沢としても。

【委員Ｂ】

1. 基本方針

世界最高水準の教育研究機能を有する総合大学を目指すため、TOKUHISA PLAN の方向性を変えずに VISION CHIBA UNIVERSITY 2015-2021 を作られたこと、その方向性も十分な評価に値する。

2. 大学運営に関する事項

教育研究機能の強化に向けた組織改革のうち、IMO の設置による研究力向上を図ったことが特に大きく評価できる。

3. 教育に関する事項

コロナ禍のため予定通りのスタートが切れなかったため実施に関する評価は不可能であったが、ENGINE プログラムを企画し、全員留学、イングリッシュ・コミュニケーション力の育成を目指したことは評価に値する。また、メディア授業などの利用、学生への生活の補助などを通じて、前代未聞のコロナ禍カリキュラム運営を行ったことも評価に値する。

4. 研究に関する事項

GP 研究部門、次世代研究インキュベータにおける様々な研究成果が出始めた。これらに関する管理・運営に IMO との連携が期待される。また、コロナ禍においても最低限の研究ができるように配慮を行ったことも評価できる。

7. 附属病院に関する事項

様々な改革なども行われているが、コロナ禍への対応は十分に評価に値する。

8. 附属学校に関する事項

ICT 活用した初等教育の推進は全国的に注目されている。柏の葉キャンパスのラグビー校との提携を機に新しい試みも期待される。

9. その他

環境 ISO を中心とした、学生も一体となった環境保全対策や積極的なエネルギーマネジメント活動の推進は評価に値する。

【委員Ｃ】

まず千葉大学の基本方針を１）国際社会で活躍できる次世代型人材の育成、２）研究

三峰（トリプルピークチャレンジ）の推進、３）次世代を担うイノベーションの創出、４）千葉大学ブランディングの強化、５）教職員による協働体制の強化、の 5 点のビジョンを定めて、その実現に向かって推進するやり方は具体性があり、非常に良かった。具体的には、ガバナンス機能の強化の目的で、さまざまな組織改革を断行し、部局予算の評価に基づく再配分の実施を行ったことは、働く人のモチベーションをもたせた。教育に関しては、グローバルな人材育成を目的として”ENGINE”と呼ばれるプランを策定したことにより、グローバルな人材育成を可能にしたことも大きく評価される。卓越大学院として「革新的医療創成卓越大学院」と「臨床人文学教育プログラム」の 2 課題が採択されたことも大きい。「学術研究・イノベーション推進機構（IMO）」をこれまでの学術研究推進機構から改組されたことも、研究の多角化、質の向上に寄与している。教育では、SULA（Super University Learning Administrator）制度を設け、これを全学対応として広げたことも評価される。研究に関しては、世界最高感度のニュートリノ観測と数値シミュレーションで切り拓く高エネルギーハドロン宇宙国際研究拠点形成が実現し、研究の分野でも質量共に一段と進歩した。さらに、免疫システム調節治療学推進リーダーの養成により、カリフォルニア大学サンディエゴ校との質の高い世界的な研究が推進された。産学連携もスムーズに行われている。附属病院は質の高い診療の実践を行い、新中央診療棟も開院し、臨床研究中核病院として質の高い臨床研究を実践した。

【委員Ｄ】

- 新学術領域として「AI 治療学」の創成を目的に「医学研究院附属治療学 AI 研究センター」を設置した。
- グローバル人材育成戦略拡大展開のための「ENGINE」の推進に尽力した。
- 部局予算を客観的指標等に基づく評価を行い、経営の再配分を行った。
- 事務機能の最適化を目指し、部局ごとの事務長制から各地区へ課長制を導入、組織のスリム化を図った。
- 持続性のある教育研究基盤構築を目指す構想により国立大学経営改革促進事業に採択された。経営改革の司令塔として「経営戦略基幹」を設置、学長ガバナンスの下、資産運用戦略を機動的に行う体制を構築した。
- 墨田区との包括連携協定を締結、地域一体となった総合的街づくりが展開される墨田サテライトキャンパスが開設された。
- 高エネルギーニュートリノ天体の世界初同定など世界的な研究実績を上げたハドロン宇宙国際センターを全学センターに組織改編した。
- 先進科学プログラムを拡大し、その活用による「次世代才能スキップアップ」プログラムが入試、教育課程の改革が評価され、最高評価「S」を受けた。
- 卓越大学院プログラムに「革新医療創生卓越大学院」等 2 課題が採択された。
- 附属病院に新中央診療棟が完成、手術室、救急救命センター、放射線部門が最新の設備となり、先端医療への施設が充実した。

【委員Ｅ】

まず、学長のガバナンスに基づいたスムースな大学運営、迅速で透明な意思決定を高く評価することができる。教育面では、ENGINE プログラムの立案・実施にあたって全学的なイニシアティブを発揮したこと、国際面では COVID-19 によって全員留学は十全な実施はできなかったものの、英語教育改革やスマートラーニングについては大規模な改革の基盤を形成したことを特筆したい。困難な中でも附属病院の経営の安定化を図ったことは、地域の基幹病院であるとともに、研究の中心でもある千葉大学病院のプレゼンスを高めることになった。

他方、研究面では、グローバルプロミネント研究基幹によって研究振興を図ったものの、外部研究費の獲得や研究におけるパフォーマンスの向上に直結していないこともあった。これは、千葉大学の研究機能の強化にあたっての構造的な問題を検討する必要を示している。ボトルネックは何であるのかの分析をもとにした方針の策定があれば良かった。

社会連携等については、千葉県・千葉市の置かれた位置に起因して、地域社会との連携を図るのか、全国や国際的な地位の向上を図るのか、バランスの取れた施策を立案するのは困難な課題である。附属学校については、教育改革のモデル校としての性格を重視するのか、進学をはじめとした教育実績の向上に注力するのか、大学全体で共有する方針が必要であったと思われる。

【委員Ｆ】

徳久学長は、2014 年 4 月から、2021 年 3 月までの二期 7 年間にわたり、千葉大学を牽引してきた。教育、研究、大学運営いずれにおいても、広い視野、将来への洞察と深い思索に基づいて、スケールの大きい大学運営を進めた。千葉大学は第三グループの研究大学として、認定されるにいたった。墨田キャンパスの開設、大学附属病院の新築、西千葉地区の再編成、さらには、イギリスラグビー高の柏の葉キャンパスへの招致など、その業績は、この時期の全国立大学学長の中でも、トップレベルを誇っている。

そのような千葉大学を目指して多くの若者が受験した。志願者数は、86 国立大学中でも第一位の座を数年にわたり確保した。授業料値上げをいとわず、全学生の国外留学を目指したが、コロナ禍という不可抗力のため、その実現には至っていないが、コロナ収束の折には、全学生の留学が実現することを期待している。

【委員Ｇ】

（１） 令和 3 年入学者試験志願者数連続 6 年、国立大で第 1 位は、千葉大学のブランド力・知名度の高さを示すもので、これまでの千葉大学関係者の努力の賜物として特筆すべき。

（２） コロナ禍でのメディア授業への積極的取組み、緊急学生支援事業など適時・適切な取組みは、大いに評価したい。

（３） GP 研究部門の日本学術振興会の賞受賞など研究面での各方面での成果は、評価したい。

【委員Ｈ】

- 医療従事者等への特別手当支給は高く評価できる
- 総額 3 億円規模の緊急学生支援事業は高く評価できる。
- GP 研究や次世代研究インキュベータの成果が確実に上がっていて、千葉大学の目玉を作る点で、高く評価できる。文系の活躍の記述がもう少しあるとなおよい。
- 創発的研究支援事業に 3 件採択されたことは高く評価できる。
- 新型コロナウイルスの影響は仕方ないが、代替プログラム（オンライン海外留学プログラム）が学生の満足いくものであるかは、懸念が残る。

【委員Ｉ】

- 多方面にわたって、挑戦的な取り組みが行われており、改革に向けた意欲が感じられる 。
- 国立大学で志願者数 1 位を継続することに象徴されるように、外部から見た魅力を高めていることは、評価できる。
- 新型コロナウイルス感染症拡大の厳しい状況にあって、大学運営や教育を円滑に進めてきたこと、機動的な学生支援を行ってきたことなどは評価できる。

【委員Ｊ】

すべての評価項目において、期待を大幅に上回る業績をあげられ、非常に優れていると敬服いたしております。特に、複雑でグローバルな社会課題の解決に挑む人材を育成するためにも各部局の改組をリードされるとともに、全員留学 ENGINE の体制を整備されました。さらに千葉大学の研究力の強化、国際発信力の向上のために尽力され、大きな成果を成し遂げられております。学術研究・イノベーション推進機構を設置されたことも、千葉大学の今後の発展にとって、たいへん重要な礎であると考えます。

【委員Ｋ】

基本理念に基づき、他分野にわたる数多くの課題に精力的に取り組まれた。
墨田サテライトキャンパスのオープンは画期的であり、今後へ向けて様々な可能性を感じさせる。
コロナ禍が想定外であったが、グローバル化の方向性は間違っていないと思われる。
今後はオンラインプログラムなどを含めた新たな手法の併用も必要か。

【委員Ｌ】

- 国際化については国際教養学部の新設により素晴らしい教育効果をあげていること。
- 入学志願者数が国際教養学部創立以来 86 国立大学の中で数年トップであることは特筆大書すべきことであると考える。

【委員Ｍ】

在任中、TOKUHISA PLAN に基づき、千葉大学を日本を代表する国立大学とすべく、信念をもって大学運営に当たられたと思います。その姿勢と経綸に敬意を表します。教職員の協力体制も大変すばらしいものがあったと思います。

【委員Ｎ】

最高評価の学長でした。

【その他のコメント】P8～P9

【委員Ａ】

- 数理・データサイエンス教育に係る全学副専攻プログラムを設置し、イノベーション人材育成を目指した展開が期待される。
- 新型コロナ感染に対し、SEEDS 基金を主な財源として総額 3 億円規模の緊急学生支援事業を実施した。流行前から展開してきたスマートオフィス設置により、メディア授業運営が円滑に開始できた。
- 感染症に関する高度な知識を身につけた医療人材育成を目的とした「感染症医療人材養成事業」に採択された。
- 入学者試験志願者が 6 年連続国立大学 1 位となった。
- 人工知能に関連する研究の重要性に鑑み、推進目的に「人工知能等関連研究支援プログラム」を実施、85 件の計画に支援を行った。
- 南極点でのアイスキューブ観測実験次世代施設となる IceCube-Gen2 で使用する検出機器開発を目的とする課題が特別推進研究に採択された。
- 真菌医学研究センターにおける世界トップレベルの真菌関連バイオリソース共同利用による拠点活動が高い評価を受けた。
- 「健康長寿社会の実現」に向けての取り組みが発展し、「ゼロ次予防戦略による Well Active Community のデザイン・評価技術の創出と社会実装」が JST の産学共創プラットフォーム共同研究推進プログラムに採択された。
- その他 CREST への採択、日本学術振興会賞も 2 名受賞している。

【委員Ｂ】

附属病院では CT 検査後の画像診断の遅れや見落とし事件が起きたこと、放射線科技師事件、女児誘拐事件などは残念なことであったが、今後の改善策も明らかとなっており、今後、さらなる改善が見込まれる。また、千葉大学は国立大学野「第三群」としてグローバルな成果を求められているが、一部の部局においては一層の努力が必要であると思われる。今後は、さらなる産学連携の円滑化と拡大、女性・若手研究者の一層の育成も求められよう。「ちば医経塾-病院経営スペシャリスト養成プログラム-」のようなユニークなプロジェクトのさらなる発展も必要と思われる。

【委員Ｃ】

多方面にわたる挑戦的な取り組みを行っていることは評価できるものの、業績調書において、それらの取り組みの効果についての検証が不十分な印象がある。開始から間もない取り組みや、コロナ禍で十分に行えていない取り組みもあり、難しい面があることは致し方ないが、効果の検証が明確であれば、さらに高い評価ができたと思われる。

【委員Ｄ】

コロナ禍への対応、その状況下での ENGINE プログラムのスタートなど、未曾有の状況

への対応は、この結果に表れない数多くの努力されたことも、別途評価すべきと思います

【委員Ｅ】
社会貢献面でも、君津市との連携による PCR 解析事業、墨田区との協力による墨田キャンパスの創設など、具体的案件の実行で、成果をあげた。

【委員Ｆ】
附属学校については、ただ「あるから続ける」だけでなく、中長期的な方向性を含めたビジョンを呈示することが必要ではないか？

【委員Ｇ】
新型コロナウイルス感染拡大の中、大学病院を中心に社会貢献に尽くされたことを評価します。